



## ＊ 研究会報告 ＊

租界・居留地班 第86回研究会

# ダイアナ・アプカーと横浜 —アルメニア人避難民の救済と人道活動—

日時：2023年10月26日（木）15:00～17:00

場所：対面（神奈川大学・みなとみらいキャンパス 11階会議室）  
＋ZOOM開催

メスロピャン・メリネ（兵庫県立大学 講師・東北大学 GSICS フェロー  
神戸市外国語大学 非常勤講師）



図1 ダイアナ・アガベグ・アプカー

「私はまるで、のどが渇いて口の中がカラカラに乾いた状態で砂漠の灼熱の砂地にいる人が、清流と木陰のオアシスに引かれるように、飢えに苦しむ人がパン屋の店に引かれるように、冷たい冬の夜に身寄りのない人が暖かく灯りのともった部屋に引かれるように、平和に引きつけられている。私は平和の働き手である。なぜなら、私の国では何世紀にもわたり戦争が続いてきたからだ。なぜなら、私は他国の帝国主義によって苦しめられた国に属しているからだ<sup>1</sup>」。

この文書の著者は日本でほとんど知られていない、明治・大正・昭和を生きた横浜外国人社会のアルメニア人ダイアナ（ディアナともいう）・アガベグ・アプカーである。ダイアナは慈善活動に熱心なアルメニア人で、偉大な愛国心にあふれ、アルメニアに一度も足を踏み入れなかったにもかかわらず、約50年間日本に住み、その人生の30年間を祖国と国民に捧げたのである。彼女は自国民に対する不当行為と闘い続け、1915年にはじまったオスマン帝国によるアルメニア人大量虐殺を逃れて日本に辿り着いた数百人のアルメニア難民に多大な支援を提供し、彼らを安全な目的地に送り出した。

## はじめに

ダイアナは現在のアルメニアでは歴史的人物としてよく知られている。彼女への関心が高まりはじめたのは凡そ10年前からであろう。2018年にダイアナ・アプカーについてのドキュメンタリー<sup>2</sup>が制作され、2019年11月に日本でも上演された<sup>3</sup>。同年に、彼女の名前がア

ルメニアの首都エレバンを中心部にある公園に付けられることが決定された。現在も彼女を巡ったさまざまなプロジェクトが準備中である。

報告者はダイアナ・アプカーの研究をはじめて12年目になるが、いまだに新しい資料が現れる。ここでは、彼女と横浜で行った彼女の人道的活動について報告する。まずはダイアナの出生から結婚までの伝記に簡単に触れた上で、横浜で行ったアルメニア難民への支援について簡単に述べる。

## 出生から結婚まで

ダイアナは1859年10月17日にイギリスによって併合されたビルマの首都ラングーン（現ヤンゴン）で、アルメニア人のアガベグ家に生まれた。彼女は8人きょうだいの第7子だった。アガベグ一家は当時すでにイギリスの植民地であったインドのカルカッタ（現コルカタ）に住んでいたが、英国領のラングーンのアルメニア人コミュニティとも関係があり、定期的に旅をしていた。ところで、彼女のきょうだいは皆カルカッタで生まれた。ディアナが1歳未満の時に親はカルカッタに戻った<sup>4</sup>。

ダイアナは5歳から初等教育を受けはじめたが、9歳の時に家族の経済的な困難から学校を辞めざるを得なかった。13歳から、ローマ・カトリック修道院学校に通い、15歳で学校教育を修了した。その後彼女の独学がはじまった<sup>5</sup>。彼女は数か国語を流暢に話した。ヒンドゥスターニー語は第一、アルメニア語は第二、英語は、学校に入ってから学び第三の言語だった<sup>6</sup>。

ダイアナは1889年にラングーンにある洗礼者聖ヨハネ・アルメニア使徒教会で、アジアを中心に貿易業を営んでいたイスファハン出身のアルメニア人アプカー・ミカエル・アプカー（Apcar Michael Apcar, 1855-1906年）と結婚した。同年8月に新婚夫婦は新婚旅行で日本を訪れ、翌年に日本に移住することにした。

1890年に夫のアプカー・ミカエルは横浜で貿易会社

を設立し、輸出入事業をはじめた。当時は、居留地制度がまだ続いており、外国人の行動範囲は原則として居留地から約 10 里（40 キロメートル）に制限されていた。これは、「外国人遊歩規程」と呼ばれる規制だった。つまり、居留地の外に出る際には、日本在住者が旅行者かを問わず、外務省に申請を出して「内地旅行免状」を取得する必要があった。アプカーも 1891 年からこの申請を行っている。申請書の内容から、まずアプカー・ミカエルが一人で 5 月に来日し、横浜で A.M.Apcar & Co. の会社を設立したことが分かる<sup>7</sup>。8 月にラングーンで長女が生まれ、その後おそらく 1890 年末にダイアナと長女がアプカーと再会したと推測される。

### 横浜におけるダイアナの活動

ダイアナの日本における活動は三つの段階に分けられる。第一は、従事していた文学活動である。彼女は短編小説や政治解説本に、主に政治分析に富んだ記事を書き、そのほとんどはアルメニア問題、世界初のキリスト教国

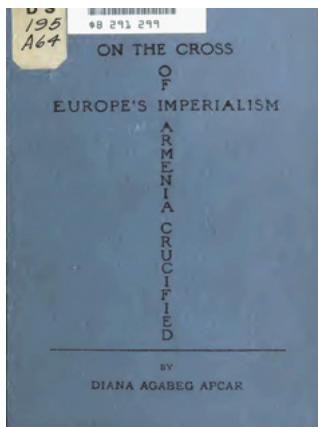


図2 1918年に横浜の福音印刷合資会社によって出版された図書の表紙

家に対するキリスト教ヨーロッパの蔑視、帝国主義と世界の「小国民」、要するに帝国の支配下の置かれていた少数民族に対する不正義の非難に充てられていた。1909年にオスマン帝国のアダナ州で起きた虐殺以来の文学活動の唯一の目的は、アルメニア問題とオスマン帝国時代のアルメニア人の苦しい状況に全世界の注目を集めることであった。

第二は世界のネットワークを通じた活動である。ダイアナは大規模な平和維持組織のメンバーやイギリス、ドイツ、スイス、アメリカ、フランスの影響のある人々と連絡を取り、虐殺の脅威に直面しているアルメニア人に彼らの注意を引きつけようとあらゆる手段を尽くした。彼女は可能な限り大量の回状を印刷し、平和維持組織に送っていた。

第三の活動は、アルメニア人大量虐殺から逃れ、1915年半ばから日本に到着しはじめた難民に直接的な支援を提供するものだった。日本でもアルメニア難民を支援するためにさまざまな募金活動が行われてきたが、言葉も文化も異なる遠い異国で直接支援を行い、その負担を一身に受けたのはダイアナただ一人だった。1906年に夫が急逝した後、彼女が事業を引き継ぎ、会社の経営を担当したのは事実だ。しかし、彼女の収入は限られており、困窮しているアルメニア難民の健康やニーズに

十分に対応することは不可能だった。彼女はまず、ウラジオストクとアメリカにあるアルメニア人委員会の会員になることで資金を確保し、そこからアルメニア難民を助けるための財政支援を受けた。ダイアナはまた、記事を執筆し、公表し、世界中に散らばっていたアルメニア人に経済的援助を求めた。そして、その対応は迅速だった。彼女は、アルメニア人が最終的に日本を離れて他の国に移る際に必要なビザの取得を支援した。さらに、難民に仮住まい、食料、衣類、医療支援を提供し、米国やヨーロッパへの安全な輸送を確保した。

1920年から、日本政府は新しい法律を制定し、それにより、日本を通過する外国人は入国時に250円を支払い、日本に滞在したい者は1500円を支払うことになった。250円は現在の1500USドル、つまり凡そ22万円に相当する。当然ながら、難民がそのようなお金を持っていることはまれだっただろう。そして、その金額がない場合、入国は禁止された。ダイアナは、日本に入国する資金のない難民を個人的に支援していると告げ、署名入りの証明書を日本政府に提出した。ダイアナは長年にわたり法を遵守して生活し働いてきたため、日本政府は彼女をアルメニア難民の後援者として信頼し、受け入れたようである。ダイアナが提示した証明書に基づいて、難民には特別な入国許可が与えられた。彼女が日本にいないければ、数百人の難民が日本を通過してアメリカやヨーロッパに安全に輸送されることはなかったであろう。多くの人は入国すらできなかったと推測される<sup>8</sup>。

彼女の国のために捧げられた長期にわたる活動は注目を集めた。1920年7月、新設されたアルメニア共和国はダイアナを駐日アルメニア名誉領事に任命した。1920年3月6日、アメリカ、フランス、イギリス、イタリア、日本の5か国の大使が参加したパリで開催された会議において、日本政府はアルメニア共和国の独立を事実上認めることで合意した。しかし、アルメニアと日本の間には外交関係が樹立されていなかった。確かにダイアナは日本によるアルメニア独立の事実上の承認を受け、領事に任命されたが、彼女の任命は日本政府に認められなかったのである。

#### [注]

- 1 Diana Agabeg Apcar, *The Great Evil* (Yokohama: The Japan Gazette, 1914), 107.
- 2 Mimi Malayan, *The Stateless Diplomat* (歴史的ドキュドマ), 2018. <https://dianaapcar.org>.
- 3 2019年7月6日から2日間大阪のシニア女性映画祭で上映。
- 4 Diana A. Apcar, "Gleanings from My Life I", *Hairenik* (Boston), December 4, 1932.
- 5 Diana A. Apcar, "Gleanings from My Life III", *Hairenik* (Boston), December 7, 1932.
- 6 Diana A. Apcar, "Gleanings from My Life II", *Hairenik* (Boston), December 6, 1932.
- 7 『条約未済国人ニ特別内地旅行許可難件』外務省記録、3.9.4.35.
- 8 メスロビャン・メリネ「二〇世紀初頭の日本とアルメニア難民——ダイアナ・アプカーの役割を中心に——」『渋沢研究』第31号、2019年1月、65-85ページ。